



Title	伊丹椿園『女水滸伝』における「侠」：前期読本と比較して
Author(s)	加藤, のん
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 75-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91188
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

伊丹椿園『女水滸伝』における「侠」

―前期読本と比較して―

日本文学・日本語史学 博士前期課程一年
加藤 のん

はじめに

伊丹椿園の読本、『女水滸伝』（天明三（一七八三）年）¹は、各回で女主人公たちが出会い、団結し、最終的に南朝再興を目指して生駒山の山寨に集結する話である。書名からも分かるように、中国明代に成立した『水滸伝』の翻案小説である。『水滸伝』では、「侠」の精神の共感によつて登場人物が結集していく。²「侠」は、『史記』『太史公自序』において「救_二人於_レ厄_一、振_二人_レ不_レ贍_一、仁者有_レ乎。不_レ既_レ信、不_レ倍_レ言、義者有_レ取焉（人を厄より救ひ、人の贍らざるを振ふ、仁なる者有るか。信を既はず、言に倍かず、義者も取る有り）」³と説明され、弱きを救い強きを砕く面と、自身の志を貫徹させる面の二つの側面がある。

しかしながら、『女水滸伝』に登場する「侠」は「弱きを助け強きを砕く」面のみが言及される。『女水滸伝』において「侠」は三人の人物（猛秀、猛秀の妹の玉園、夕虹の父）に対して使用される。猛秀は「侠気多きを以て、人の為に仇を報じ恨みを酬ひ、弱きを助け強きを砕くことを好み」、玉園は「心は兄と同じく侠気強く」、夕虹の父は「侠気を立る事を喜び、交遊する者多く、人来て事を頼めば我が身を顧ずして必ずこれを助け整へ」と述べられるのである。このように『女水滸伝』において「侠気」は「弱きを助け強きを砕く」人物を述べる際の使用に限定されている。しかし、同時代の読本における「侠」は『史記』と同様に志を貫徹させる語として登場し、特に遊女に多く見られる。一方で『女水滸伝』の遊女月華・雪光にも、同時代の読本に登場する遊女に類似する行動が見られるが、そこらは「侠」として語られない。

本発表では、まず『女水滸伝』に登場する遊女月華・雪光と他の前期読本に登場する女性を比較し、前期読本において、月華・雪光と類似した行動をする女性が「侠」なる存在として捉えられていたことを確認する。その上で、類似する行動が見られるにもかかわらず、月華・雪光が「侠」として述べられない理由を考察する。

¹ 本発表の本文は、石川秀巳・磯貝寛子・宝田かほる編「翻刻」女水滸伝」（『読本研究』第九輯 溪水社 1995年 10月）（底本 国立国会図書館蔵本）を使用し、ルビは適宜省略した。なお、便宜上、以降の引用文献も含めて、「侠」は全て「侠」に直した。

² 石川秀巳『女水滸伝』論 「江戸の水滸伝」のうち「国際文化研究科論集 2006. 12 pp. 156-147」を参考にした。

³ 青木五郎 新釈漢文大系『史記』十四（列伝七） 明治書院 2014 p. 210

一、白話小説と「俠」——「杜十娘怒沈百寶箱」に注目して

『女水滸伝』に登場する遊女月華・雪光は夕虹の娘として登場する。彼女らはある武士二人にさらわれ、「無道なる者に汚辱せられんよりは死るに如じ」と考えて海に飛び込む。信念に基づいて海に飛び込む行動には、『警世通言』第三十二卷（『今古奇観』第五卷）「杜十娘怒沈百寶箱」⁴（以下「杜十娘」）に登場する、同様の状況で海に飛び込んだ遊女十娘が投影されていると考える。

「杜十娘」において、十娘を「後人評論此事（中略）獨謂十娘千古女俠（のちの人はこの事件を評して、（中略）ただ十娘だけは、世にも稀なる女傑で⁵）」と、後の人間が「俠」の言葉で褒めたことが語られる。「杜十娘」において「俠」の定義は明確に示されず、また十娘自身も最終部以外に「俠」を用いて語られることはない。しかし、十娘を身請けしようとした李甲が友人の柳遇春に百五十両借りる場面で、十娘は遇春に「此乃女中豪傑」、つまり女の中の豪傑であると語られる。好いた男のために心情を貫く様は「豪傑」に類するものであり、そのような彼女は「俠」なる存在として捉えられていた。月華と雪光自身に「俠氣」の言葉が付与されることはなく、また男まさりの性格描写もなされないが、信念から海に飛び込む点は「俠」なる杜十娘の投影と言えよう。

『女水滸伝』における「杜十娘」の投影は、「杜十娘」でも使用された韻文（挿入句と呼ぶ）「正是、他日相逢難⁶予必⁷、此時分⁸手最堪⁹憐¹⁰といへるが如くなり」が月華・雪光の登場の直前に挿入されていることから分かる。月華・雪光は第四回で登場するが、本挿入句は第三回末尾で直前の話のまとめとして語られる。伊丹椿園は創作に際して典拠そのままの翻案を行うことが少ない。また挿入句は和刻として和訳する際に省略されがちであった¹¹。あえて白話小説と同一の挿入句を使うことで、その後の原話の展開を予感させ、登場人物を重ね合わせさせた、つまり月華・雪光にも自らの意志を貫く「俠」を付与したと言える。

二、前期読本における「俠」——『繁野話』、『英草紙』、『新斎夜語』に注目して

前節で示したような「杜十娘」と『女水滸伝』の関係を、当時の読者が想起できなかったとしても、前期読本において共通して登場する「俠」との類似に気がついたと考えられる。本節では都賀庭鐘『繁野話』、『英草紙』、梅隴館主人『新斎夜語』の三作品を取り上げ「俠」の性質を再考する。この三作品は椿園の『唐錦』（安永九（一七八〇）年）

⁴ 訳は千田九一他 訳『中国古典文学全集 第18巻 今古奇観 上』平凡社 1958 p. 76

⁵ 抱甕老人『今古奇観』上 人民文学出版社 1979 p. 78

⁶ 例えば『両劍奇遇』と『平妖伝』の関係である。（徳田武「第一部 第五章 初期読本における寓意性と文芸性」『秋成前後の中国白話小説』勉誠出版 2012 p. 141）

⁷ 中村綾 第二章『通俗忠義水滸伝』翻訳者の問題——正編・拾遺編の相違点を通じて——（『日本近世白話小説受容の研究』汲古書院 2011 p. 114）（初出：『国語国文』通巻八八一号、平成二十一年一月）

の見返しにおいて言及された書物であり、前期読本の「侠」の人物像は椿園や読者の念頭にあったと考えられる。

『繁野話』(明和三(一七六六)年)第五卷八篇「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話」。(以後「江口の遊女」と呼ぶ)も「杜十娘」を翻案したものである。「江口の遊女」と「杜十娘」のあらすじはほとんど相違ないが、「江口の遊女」においては語り手による挿入句が省略される。唯一、「船中急に救はんとする時白波滾とて影もなし。正に是こそ盛粧躍^レ海目無^レ涙 去処^レ侠魂伍^二緑珠^一 此やいふべき」が、女主人公白妙が海賊と結婚させられそうになった際に船から入水する場面で挿入される。白妙が水に飛び込んだことが、緑珠という烈女と同じ精神であることを示すとともに、その意志を貫く様が「侠魂」であると読むことができる。なお、別の場面でもこの行動が「侠」であると述べられ、しかも右ルビに「けふ」、左ルビに「いきぢだて」が振られる。「江口の遊女」の「侠」は「いきぢ」つまり、自らの立場を貫こうとする気構えとして使用され、自らの意思を通したことを示している。

都賀庭鐘『英草紙』(寛延二(一七四九)年)第四卷六篇「三人の妓女趣を異にして各名をなす話」においても「侠気」の遊女、鄙路が登場する。鄙路は「生得に^{けふき}ありて志男子に勝れり。(中略)道路に是非ふを見る時は、かならず其の弱き方を助く。義によつて命をかへりみず。」という存在として登場する。また、鄙路は客の安達東蔵を匿う行動をとるが、「足下をかこひ養ひしは、我が父母なく姉妹なく、「心易き身の上なれば、一時の^{けふ}をなす也」として、「侠」に基づいて相手を助けただけであることが明示される。

以上二作品から、庭鐘の「侠」は「弱きを助ける」意味と、「信念を通す」両方の意味を内包すると読み取れる。また、両作品の「侠」の使用の共通点としては、「信念を通す」意味での使用である点、「侠」の持ち主が遊女である点があげられる。

この信念を通す遊女像は同じく前期読本、梅臚館主人『新斎夜語』(安永四(一七七五)年)にも共通する。第四卷七篇「室の妓女松風が任侠幸を迎ふ」において、室の妓女松風は「殊に^{じんきやう}を好みて、意気地を立つる事を専とする妓」であると言われる。その性質に違わず、物語の最後で隼人という男性に求婚されるも、先に別の男雪平と約束があることを理由に断る。そしてその態度は雪平に「^{きやうし}」と表される。つまり、『新斎夜語』においても自身の信念を貫く様が「侠」であることが示される。

『女水滸伝』の「侠」に関して、田中則雄は、前期読本作家の都賀庭鐘と椿園の「侠」

。高田衛監修 稲田篤信・木越治・福田安典 編『江戸怪異綺想文芸大系第二巻都賀庭鐘・伊丹椿園集』国書刊行会 2001 p. 771-773

。徳田武校注 新古典文学大系 80『繁野話・曲亭伝奇花釵児・催馬楽奇談・鳥辺山調綫』岩波書店 1992 を使用した。

。校注・訳・中村幸彦 他 新編日本古典文学全集『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』小学館 1985 を使用した。

。飯倉洋 一校訂代表『江戸怪談文芸名作選 第二巻 前期読本怪談集』国書刊行会 2017 を使用した。

が「世間的観点や規範に照らしてどうあるべきかではなく、ひとえに我が心から奔出する所のものに」¹²よつているとし、両者の「侠」の近似を指摘する。確かに『女水滸伝』の主人公らは賊であり世間的規範には適合しない。しかし、庭鐘の「侠」をはじめ、前期読本の「侠」は自身の志を貫く点に重点がおかれ、『女水滸伝』の「侠」とは異なる。

三、『女水滸伝』における「侠」

なぜ『女水滸伝』において「侠」の「弱きを助け強きを砕く」面のみが明言されたのか。これは「侠気」の言葉で説明のなされない夕虹と秀蘭にも「弱きを助け強きを砕く」言動が見られ、くりかえし強調されるように、「弱きを助け強きを砕く」ことが本作品の主題であるからだと考えられる。「侠気」の持ち主として明言される玉園は「今足利の末に当て天下の政道明かならず、民を苦め財を貪て不義の富貴をなす輩多く、都て皆天の悪む所なれば自ら奪掠るに心易し」、つまり、貧しい民衆を苦しめている富貴な人物は皆に憎まれており、懲らしめのためにその所持品を奪つても良いという旨の発言をする。「侠気」とは説明されない夕虹と秀蘭も「不義非道なる輩の貨財を奪掠る共、必ず善を修し道を守る人に心を付て、必ず害をなす事勿れ」（夕虹）、「正直に道を守り仁慈に人を救ひ憐みて徳を積家を窺ず、貪欲邪行にして世を欺き人を苦めて富を致す者の方のみ撰み襲ひけれ」（秀蘭）と「侠」の持ち主の玉園と同様の発言をする。さらに玉園の「侠気」は第一回の冒頭で明言され、また『女水滸伝』の終局は足利と主人公らが対立する展開であり、本作品においては「弱きを助け強きを砕く」ことが主題となっていると言えるだろう。この「弱きを助け強きを砕く」態度が以上に見てきた「侠」の言葉の使用法にも現れていると言える。

おわりに

以上確認してきたように、遊女が信念を貫く様は「侠」の精神であると表現されてきており、『女水滸伝』の遊女も「侠」として捉えることが可能である。しかし、椿園はそのような遊女を「侠」の言葉で説明せず、「侠」の「弱きを助け強きを砕く」面を強調した。これは、『女水滸伝』が最終的に足利という「強きを砕く」話になっていることとの現れである。

今回は扱うことができなかったが、後期読本においても「侠」は重要な語であり、例えば曲亭馬琴が『開卷驚奇侠客伝』を書くなどしている。本発表の「侠」の分析は『女水滸伝』理解だけでなく前期読本と後期読本を包括的に考える一助となるだろう。

¹² 田中則雄 第二部 読本周辺の諸問題「第二章 水滸伝と白話小説家たち」『読本論考』汲古書院 2019 p. 145（初出『アジア遊学』131 2010 年 3 月）